

## 〔研究ノート〕

# 初年次実践教育において涵養されること その2

—2016年度ソーシャルワーク実習入門における学生の学びを通じて—

川島 恵美\*1、梓川 一\*2、岩本 裕子\*3

### 1. 研究の背景と目的

社会福祉専門職教育においては、その前提として「当該市民の生活問題を共に生きる市民として理解できることが必要であり、そのため『民主的で創造的な市民』性を養成する必要がある」（川廷、2007、p142）という問題提起もあるように、関西学院大学人間福祉学部社会福祉学科における4年間の専門教育の中では「社会福祉学に関する専門知識を身につけ、社会福祉課題の解決に関与し、貢献できる」専門職および市民的貢献ができる人材養成を目指して教育を行っている。

しかしながら、教育者側が意図した目的が果たされているのかについては十分な検証がなされているとは限らない。そこで筆者らは、学生たちの学びの内容を、学生による授業のふりかえりを分析することから見出していく研究を計画した。まず、初年次実践教育として位置づけられるソーシャルワーク実習入門（以下、SW実習入門）という科目について、この科目の3本の柱の一つである1泊2日の千刈合宿について、学生一人ひとりのねらいと達成度を比較する形で、習得した学びの考察を行った（川島、梓川、岩本、2016）。さらに、SW実習入門の授業を受講した学生たちが、半期の授業全体を通して何を学んだのかということの質的な分析を2015年度から2017年度にかけての3年間について行い、これらの内容から、初年次実践教育において、教育者側が意図した目的が達成されているのかを検証すると共に、

そこから導き出される教育プログラムに必要な要素を明確にしようとするのが本研究の目的となる。2015年度分についてはすでに分析が行われており（川島、梓川、岩本、2018）、ここでは、第2段階としての2016年度の分析結果を報告するものである。

### 2. 調査研究の方法について

調査研究の方法は、2015年度の分析と基本的に同じく、山浦（2016）により実践的に確立・開発された質的統合法（KJ法）を活用して行った。基本的に、授業の方法、展開、学生へのメッセージ等は大きく変わることがなく授業が実施されているため、学生のふりかえりの内容が、2015年度の内容と共通するものも多くあった。そこで、大きな枠組みとしては前回のシンボルモデル図を参考にしているが、単純に前回のモデルに振り分けるような形での分類はできるだけ避けて、カード内容は新たに個別に吟味し、同じような記述であってもその意味を十分にくみとり、検討しながら分類を進めた。

本調査のデータは、2016年度の秋学期にSW実習入門を履修した92名の学生が記入したふりかえりシートの内容をカード化したものである。尚、この人数には1回生以外に、3回生と4回生の各1名、2回生の2名が含まれるが、カード化は無記名で行ったため、これらのカードも全体に含めて分析を行った。得られた有効カードデータ数463枚を以下のような手順で分析した。

キーワード：初年次実践教育・体験的学び・学び方の学び

\*1 関西学院大学人間福祉学部准教授

\*2 東大阪大学短期大学部介護福祉学科教授

\*3 関西国際大学教育学部講師

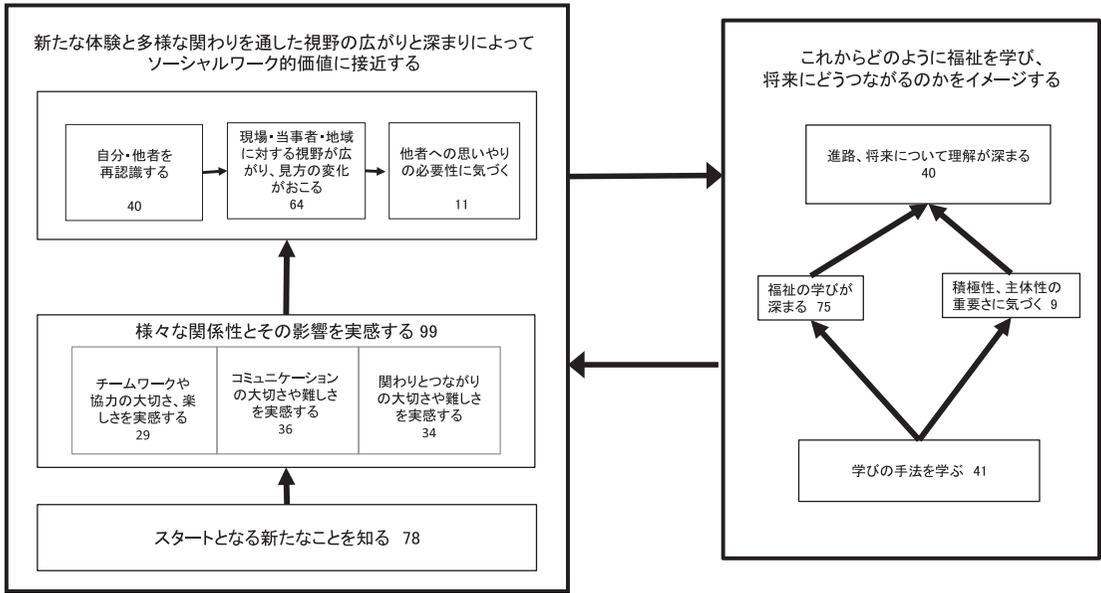


図 1 「2016 年度ソーシャルワーク実習入門における学び」シンボルモデル図

(1) カード分類の留意点

カードは一つのカードあたり一項目の内容として単位化を図った。これらのカードを分類し、グループ分けをする際に、以下の点に留意した。①全てのカードを見渡せるように広げ、調査者の個別の意図が入らないように留意し、分類を進めた。②分類の際には、完成図を先読みするのではなく、個々のカードの内容とつながりに着目することを意識した。③分類されたカード群に仮のグループ名をつけた。最終で 11 のグループとなった。また内容が意味不明のカードが 7 枚あり、それらは意味不明グループとネーミングし、分類からはずした。

(2) カード分類とグループづくりについて検討を繰り返す

それぞれに分類されたカードは、仮のネーミングをした A4 サイズの白紙に貼り付けて区分・管理をした。グループづくりの作業の途上で、各カードの内容を思い出し、確認することで、つながりや共通性を再考し、メンバー間での合意があれば、カードの所属グループを変更することもあった。すべてのカードが分類された時点で第一段階を終了とした（終了までに 2 日間、約 6 時間半を要した）。

(3) 大きな関係性と流れからシンボルモデル図の作成へ

A4 サイズの白紙につけられたネーミングに基づき、各グループ間のつながりや関係性の検討を繰り返した（2 日間約 7 時間）。特に、2015 年度のシンボルモデル図との共通点を明らかにすると同時に、前回の内容に影響を受けていないかという点については研究者間で何度も確認および検討を繰り返した。

最終段階として全体の流れを重要視しながら、全体像をわかりやすく整え、2016 年度のシンボルモデル図（図 1）を完成させた。2015 年度のものと同じように、シンボルモデル図の各項目には、それぞれの項目に関連して記入されたカードの枚数を示した数字を書き込み、質的な読み取りと同時に、カード枚数による内容の厚みを示すものとして参考にした。

3. 分析結果と考察

SW 実習入門の授業では、学生は体験学習型プログラムに取り組み、仲間とそれらの体験を重ねることで実践的学びを体得していく。SW 実習入門の最終授業において学生が記入したふりかえりのカードの内容を分析すると、学生が何かに気づ

き、そして感じとっている学びには質的な違いがあった。それは、シンボルモデル図に示されるように2つに大別することができる。

第一に、ソーシャルワーク的価値に接近する学びである。学生は、新たな体験と多様な関わりを通して、これまでの自分を見つめ直し、自らの視野の広がりや深まりを感じている。この学びはシンボルモデル図の左側に位置している。

第二に、福祉の学びと将来についてイメージする学びである。在学中にどのように福祉を学んでいくのかを認識し、4回生まで、さらには卒業後の将来に向けて、福祉の学びとは、多様な学びの要素がどのようにつながり、どのように展開していくのかについてイメージしていく。この学びはシンボルモデル図の右側に位置している。

以下に、分析結果と考察を述べる。なお、以下のカギ括弧で示したものは学生が記述した内容である。

### (1) ソーシャルワーク的価値に接近する

〈スタートとなる新たなことを知る〉(第一の段階)

SW 実習入門における体験的学びの第一歩として、学生は「知ること」を挙げている。知ることをベースにして、何かを学び、感じていく段階である。まずシンプルに実情を知ること、そこから違いを知ること、評価を知ることへ、以下のプロセスを進んでいく。

第一に、「地域を知った」のである。学びの方法・プログラムにあるタウンウォッチングやキャンパスウォッチングから「地域を新たに知ることができた」「今まで知らなかった自分の街を知った」「自分の住んでいる街のいろんなことを知れた」などがある。

第二に、「現場の現状・実態を知った」のである。福祉現場を訪問することにより、利用者との出会い、彼らの実生活を垣間見ることができる。また専門職の実践の様子をみることで、福祉現場の特質や課題を知ることができている。具体的には、「施設の重要さ・役割」「現場の実態」「施設の特徴」「利用者さんの生の声」「障害者の方が働く職場」などである。さらに福祉現場での貴重な学びとして「施設の雰囲気」「アットホームな雰

囲気」「実際の様子を肌で感じる」「現場に関するイメージ」とあるように、「現場の雰囲気」を知っていく。

第三に、「地域のいつもの違いを感じた」のである。ふだん何気なく過ごしていると気づかなかったことがある。それらを SW 実習入門の取り組みから意識的に改めて知るのである。そこから「地域のプラス面とマイナス面」を知る。例えば、「地元の素晴らしさを感じた」「町の良さを知れた」「いかに住み良い場所なのかを改めて感じた」「自分の町の良い所悪い所を知った」などを挙げている。

〈様々な関係性とその影響を実感する〉(第二の段階)

知ることから、感じる・気づく体験へ展開していく。仲間との「関わりとつながり」「チームワークや協力」「コミュニケーション」の3つを主たる要素として実感していく。これらは人間関係を形成していく学びにつながっている。

①関わりとつながりの大切さや難しさを実感する

第一に、「友だちが増えたり、関係がよくなったりした」ことである。仲間とともに多様なワークに、取り組んでいく体験を通して、1回生としてまだ出会えていない・話したことがない仲間との出会いを経験する。個々のワーク達成という目標を目指して、仲間とともにチャレンジしていくことから、グループ内で仲間の親密性や関係性が築かれていく。

第二に、「意見交換しあい共有することは大切」であると気づくことである。多様なワークに取り組んでいくためには、無作為なチーム形成からできあがったグループ内の仲間と向きあいながらの共同作業が求められる。そこでは会話をし意見交換をしなければ前には進まない。向きあわなければならないように設定された環境がある。こうして「いろんな人と話をして」「グループ活動や発表を通じて知りあえた」ように、考えや思いを共有化するプロセスを体験している。

第三に、「他者との関わりやつながり」ができたことである。「合宿で同じ時を過ごしていくうちに、つながりというものが生まれた」、そして「人とのつながりの大切さがわかった」のである。

その後、取り組みを続けていくうちに「他者と関わる難しさ」や「人と仲良くなる難しさ」を実感していく。ここでの他者とは、SW 実習入門を履修する仲間に加えて、この科目をサポートする先輩（ラーニングアシスタント、以下 LA）も含まれている。先輩からの助言や促しなどを通じて「先輩との関わり」もできていく。

②チームワークや協力の大切さ・楽しさを実感する

第一に、協力の大切さを実感することである。具体的には千刈合宿での協力を挙げている。協力の意味として「効率よく作業ができること」とともに、「協力の楽しさ」も感じている。活動をするときには「他人と協力することの必要性」を合宿でのワーク体験から学んでいる。

第二に、チームワークの大切さを実感することである。チームとしてメンバーが互いに「支えあう」「手を取り合う」「ともに行動する」「カバーする」「助けあう」ことの重要性を実感していく。こうした取り組みから、チームは目の前の困難に立ち向かい、「乗り越えられる」経験を重ねていく。そこから「成し遂げる」こと、「何かをやり遂げること」を通して達成感を味わい、チームワークの大切さを体感していく。

③コミュニケーションの大切さや難しさを実感する

コミュニケーションをテーマに、聞くことと伝えること（話すこと）の双方を取りあげて以下の三つを実感している。

第一に、聞くことは大切であることを実感する。何をどのように聞くのかに関して、「周りの意見」「色々な人の話」「たくさんの意見」「自分と違う意見」を、「しっかりと」「じっくりと」「幅広い分野について」聞くことの重要性を認識している。

第二に、伝えることは大切ではあるが、難しいと実感する。自分の意見、気持ち、考えを他者に伝えていくことは、チームでの取り組みにおいてわかりあえるためにも大切であると感じるが、多くの学生が「うまく伝えること」「正確に伝えること」「伝えるべきことを短時間でまとめること」など、伝える難しさを痛感している。

第三に、コミュニケーションの方法と大切さを

実感する。チームでワークに取り組んでいくために必要に迫られ、聞くことと伝えることの相補のやりとりを体験的に理解していく。そこからまず「助けあう」ためにもコミュニケーションは重要であり、「コミュニケーションの方法」も学んでいく。

〈新たな体験と多様な関わりを通じた視野の広がりや深まりによってソーシャルワーク的価値に接近する〉（第三の段階）

第三の段階においては、次のような関係性と流れがある。これまでの多様な関係性における学び・気づきから、まず、再び自己を見つめていく。そこから二者の関係性および地域における関係性へ、さらにソーシャルワークの価値づけにつながっていく。

①自分・他者を再認識する

第一に、同じと違いを再認識する。これは第一の段階における「知る」とは、踏み込みや深みが違う。ワークを通して仲間との関係性ができてから、さらに知る＝再認識していくのである。再認識では、わかりあえる仲間同士の関係性の始まりとしての出会いがあり、同じことと違うことを認識していく。他人が自分とはどのように「同じか、違うか」をわかることで、仲間のことをより理解できるようになり、関わりが深まる。「自分と同じような考えを持つ人と出会えた」一方で、「人それぞれ色々な考えや感じ方をもつ」「価値観の違いを知る」「グループそれぞれが違った味を出す」など、人はそれぞれに違うことも感じていく。そこから「友人の夢」を聴いたり、「福祉への思い」を知ったり、「悩んでいた、迷っていた」していることがわかり、他人・仲間の思い・意識・夢を受けとめて、わかちあっていく。

第二に、自分が知らないこと、自分は無知であることを知る。他者との関係性などから「まだまだ自分の知らないことがたくさんある」ことに気づき、「自分がどんなに自分のまわりについてわかっていないかを確認する機会」になる。ここには、自分は何もわかっていないという自覚と自己認識に至る段階がある。

第三に、自分のことを見つめる。様々な気づきをきっかけとして「自分の性格も見直す」「自分

自身のことを考え直す」「自分のことを見つめ直す」ことができていく。そこから「自分が改善すべき短所」や「興味があること」について自覚ができ、自分のことがわかりはじめる。

第四に、さらに自己認識は進んでいく。「自分の意見を持つこと」「自分なりの答えや思いをもつこと」が重要であるととらえていく。そこからグループで取り組むときの関係性において「自分が何をすればいいのか」「自分のやるべきこと」を再認識し、他者との関係性における自分の役割を認識・自覚していく。

②現場・当事者・地域に対する視野が広がり、見方の変化がおこる

SW 実習入門のテーマの一つとして施設や現場へ見学に行くことにより、自身の想定とは違う現実を知る。これまでの自分の思いとは違うこと、「想像していたものとは、全く異なる」ことを目の当たりにし、「自分の想像とのギャップが生じて、学ぶことがたくさん」あることに気づく。例えば、「自分の町が抱えている問題」「街の現状や課題」が見えてくる。

そこからこれらの課題をなんとかしたいと思う気持ちも芽生えてくるが、「現時点では改善できないもどかしさ」を感じつつ、それゆえに「地域への理解・興味をもつ」ことから「もっと知ることができ」、「愛着を深めること」や「地域のつながり」を学ぶことができくる。

学びにおいて興味や関心をもてることは重要である。こうした姿勢から多くの学生が「視野の広がり」という自身の変化を感じている。さらには「新しい考え方や視野が生まれた」「多面性があることを学んだ」「視点を変えて物事を考える」「多角的になぜ?と思う」というように学びが展開していく。

このようにして現場や当事者に対する見方に変化が起き、イメージの変化が起きている。例えば、施設に対しての暗いイメージが良い方向へ変わり、「施設に対する偏見がなくなった」のである。つまり、施設を見学して「リアルな実情を知ること」により、これまで自分がもっていた偏見に気づくのである。

こうして普通・当たり前の意味を再確認していく。普通に親がいる自分の「今の生活は当たり前

ではない」「当たり前は人それぞれにちがう」ということに気づき、人の生活や人生について学びを深めていく。これらは自分の価値観を捉え直すとする試みである。

ここでのプロセスには、違いに向きあい・認識し、新しい見方や視点をもって捉えていこうとする姿勢があり、自分のなかでの変化・変容が生まれている。人はそれぞれであり、違っていて普通であるという捉え方があり、自分と他者の関係性を見つめていこうとしている。こうした感覚から「障がいをもつ人を身近に感じた」「子どものパワーはすごいと感じた」「お年寄りとの関わりの難しさや楽しさを知ることができた」「ホームレスの生活を学んだ」を挙げるなど、向きあう対象者の理解につながっていく。

③他者への思いやりの必要性に気づく

多様な関係性からの気づきと学びから、再び自己を見つめ、関係性が重要であることを認識していく。最終段階として、相手・人間の尊重へ深まっていく。「人との関わりは互いに相手のことを思いやることで成立する」と理解し、そこから「相手の立場から物事を考え、理解しようとする」姿勢を身につけていく。こうして「相手のためになる本当の優しさ」を学んでいく。これらは人の理解、人間の尊重として、ソーシャルワークの価値づけにつながっていく。

(2) これからどのように福祉を学び、将来どうつなげるのかをイメージする

ここでは大きく3つの段階に分かれる。まず、第一の段階は「学びの手法を学ぶ」、第二の段階には「福祉の学びが深まる」と「積極性、主体性の重要さに気づく」が並び、最終的に第三の段階として「進路、将来について理解が深まる」につながっていく。

〈学びの手法を学ぶ〉(第一の段階)

SW 実習入門の授業では、「学び方、ノウハウを身につけた」「実体験の大切さを学んだ」「観察が大切だと学んだ」「学生生活の送り方が分かった」というように、「学ぶ」ということについての根源的な理解が実感を伴ってなされている。ここでは大きく2つのカテゴリーに分けることがで

きる。

①「学び方、ノウハウを身につけた」

このカテゴリーのカードは20枚あった。内訳を見てみると、見学実習などを通して、「事前学習の仕方が分かった」「事前学習の大切さが分かった」「具体的に深く調べる楽しさを知った」など、事前学習の方法と重要性、楽しさを学んでいる。グループでまとめたことを発表する機会も多いことから「人前に出て話すことに慣れた」「(いかに)多くの人に自分たちが感じたことを上手く伝えられるかを学んだ」「わかちあいの時間を通して、人にわかりやすく興味を持ってもらうような話をする工夫」など、発表し伝える手法についても学んでいる。また、「振り返ることの大切さを知った」との意見もあった。このように、事前学習や、わかちあい、ふりかえりといった学習プロセスが彼らの中に位置づいていったことが見て取れる。

さらに、一連の学習プロセスのなかで、「リーダーシップの取り方やチームのまとめ方を学んだ」や、「意見のまとめ方、関わり方を学べた」など、グループで動くことが多いことからグループ内での役割を遂行する力、グループ運営についても学び、身につけている。

②「実体験の大切さを学んだ」

このカテゴリーのカードは18枚で、①の「学び方のノウハウを身につけた」のカテゴリーのカード数とほぼ二分する形であった。見学実習を通して、多くの学生が「福祉は座学だけでは学べない」「自分の目で見て感じることの大切さを学んだ」「本やネットだけでは得られないものがあると学んだ」というように、現場に実際に足を運び、実体験することの大切さを学んでいる。

その他、数は少ないが、タウンウォッチングや施設見学を通して「観察することの大切さ」、LAとの関わり等を通して「学生生活の送り方」などを学んでおり、全体を通して幅広く大学生として学んでいく上での基礎となるような学びのノウハウを習得したことを実感している。

〈福祉の学びが深まる〉(第二の段階)

福祉の学びが深まるというカードは75枚であり、図-1右側の「これからどのように福祉を学

び、将来にどうつながるのかをイメージする」という大カテゴリーの中では最も多い数となっている。この内訳は以下の7つのカテゴリーに分かれる。

①「社会福祉の知識を学ぶことができた」

このカテゴリーでは、「社会福祉の知識を改めて学ぶことができた」のカードは1枚であるが、挙がっている。漠然とした表現であるが、福祉の学びが深まることにつながる。この「知識」については、まだ1回生であり、専門科目を未履修であることから、ソーシャルワークで使用される「価値」「知識」「技術」に分けた「知識」という認識ではなく、社会福祉全般について様々なことは学べたことを指している。具体的には以下のようなカテゴリーで表されている。

②「地域福祉に関することを学んだ」

このカテゴリーでは「地域福祉について詳しく知ることができた」、「地域のまちづくりの大切さを学べた」など、「地域福祉を知る」ことができたことを挙げている。具体的な記述では、最も多かったのはタウンウォッチングを通して「他の地域を知り、自分の地域との違いに驚いた」「いつも過ごしていて気付かなかった施設や景色を見つめることができた」などをはじめ、「地域の特徴の違いを知った」ことである。

また、見学実習を通して「日頃の施設と地域のかかわり」や「地域といのは人と人とのつながりを大切にしていかなければならない」など、「地域とのつながりの大切さ」を学んでいる。

③「福祉の仕事の実際(大切さ、やりがい、大変さ)を知った」

このカテゴリーでは、見学実習を通して現場には「様々な仕事があることを学んだ」、「福祉職の大変さややりがいを感じた」など、「福祉の仕事の実際(大切さ、やりがい、大変さ)を知る」きっかけとなっている。具体的には、「施設の閉鎖的にならない工夫をたくさん発見することができた」、「職場づくりの工夫を学んだ」など、「現場の工夫を知った」ことが挙げられている。また「ソーシャルワーカーの方々の惜しまない努力を感じた」、「福祉従事者の意識の高さを実感した」など、「専門職の意識の高さに触れる」ことができたことも挙げられている。

#### ④「ソーシャルワーク（対人援助）の方法を学んだ」

このカテゴリーでは見学実習を通して「障害児との関わり方について学べた」といった一人ひとりにあった支援方法があること、利用者理解のために「人々の暮らしの社会背景や価値観を知ることが大切」であること、「自己選択の場面を増やす関わりが大切だと学んだ」などソーシャルワーク（対人援助）を実践していく上での価値や技術について学ぶことができています。

#### ⑤「社会における福祉的課題に気づいた」

このカテゴリーでは、「タウンウォッチングを通じて、都会や田舎に関係なく福祉の問題は多く潜んでいる」ことや、「見学実習を通して今の子ども達に必要なことを考える機会になった」など、社会には多様な福祉的課題が存在することを具体的な課題とともに気づく機会となっている。

また、この福祉的課題のなかでも、見学実習を通して「県や市そのものが高齢者の方がどうしたら住みやすくなるかを考えていることが分かった」、ホームレスの問題が個人の問題ではなく「社会問題が目に見える形として集積したものであり、人ごとではない」というように、マクロ的な理解にまで進んでいる。

#### ⑥「資格より実践力が大切」

このカテゴリーでは見学実習などを通して実際のソーシャルワーカーの様子や話などから、「資格を持っていることだけが、障害がある人と働くうえで大切なことではない」「資格などよりも実践的な力が求められる」といったことが挙がっている。ソーシャルワークを学ぶ学生は、「ソーシャルワークを学ぶ＝『社会福祉士』という国家資格を取得する」という図式に陥りがちで、得てして資格を取得することが目的化してしまう可能性がある。したがってこの気づきは非常に根本的なことではあるが、それ故に、この気づきのうえに学びを積み上げていくことは必要であり、初年次にこのことに気づくことは重要である。

#### ⑦「福祉全般に対する見方が変化した」

このカテゴリーでは今まで、福祉の学びについて、具体的にどのようなことを学んだのかをみてきたが、このカテゴリーでは、「全体的に視野が広がった」や「福祉のイメージが自分の中で変わ

った」など、今までそれぞれが思い描いていた「福祉」について、実際に学ぶことでイメージや見方が変化している。これらを通してそれぞれの福祉についての学びが広がり、今までもっていたイメージを変化させることにまでつながっている。

#### 〈積極性・主体性の重要性に気づく〉第二の段階

このカテゴリーでは、「意欲が向上した」「積極的・主体的に関わることは大切である」の2つに大きく分かれる。

##### ①「意欲が向上した」

このカテゴリーでは、「福祉関係についてもっと勉強したいと思った」「今後の目標も明確になりモチベーションが上がった」というように、非常に前向きな気持ちに変化している。ここで特徴的なことは、見学実習、合宿、LA など、本授業のあらゆる要素から感じられている点である。

##### ②「積極的・主体的に関わることの大切である」

このカテゴリーでは「自ら積極的に行動すべきだと感じた」「自分で考えることの重要性を学んだ」など、自らが積極的に考え、行動することの重要性について気づいている。

#### 〈進路、将来について理解が深まる〉（第三の段階）

このカテゴリーでは、「将来について考えることができた」と「社会福祉士の課題と実習についての理解が深まった」の2つに大きく分かれる。

##### ①「将来について考えることができた」

このカテゴリーでは、「将来」「未来」「今後」「これから」がキーワードとなる。「将来のことを考えるきっかけになった」「進路について考え直すことができた」など、将来について考えることができたことを挙げている。その中には「新たな目標設定ができた」、「進路の幅が広がった」など、より将来についてイメージ化することができている。さらには「自分はどうか行けばいいか、もう一歩前進できたと思う」「未来への見通しができた」というように、その道筋についてもイメージ化ができている。より具体的な記述では、「将来に対しての悩みがいくつか解けた」「将来についての不安が少し減った」など、具体的にイメージ化できたことで、不安や悩みが解消されること

にもつながっている。ここで特徴的なことは、LA の存在である。このカテゴリーのほとんどのカードは、合宿での LA と話をしていく中でイメージ化されている。

②「社会福祉士の課程と実習についての理解が深まった」

このカテゴリーでは、「社会福祉士になるための課程を知った」「実習とはどのようなものか話を聞くことができた」など、将来のなかでも「社会福祉士課程」や「実習」についての理解が深まっている。

(3)「ソーシャルワーク的価値への接近」と「福祉の学びを通じた将来へのイメージ」の関係性と今回の分析における特徴的な要素

2015年度のSW実習入門の学びの分析において、図1における大きな2つのくくり、すなわち「ソーシャルワーク的価値への接近」と「福祉の学びを通じた将来のイメージ」の関係性については、様々な体験、学びの機会を通しての関係性という要素から、自他を見つめ、自己の変化や成長を感じ取り、そのうえで人間観、自己覚知や倫理観などのソーシャルワークの専門性を習得するということをベースとして(左側)、福祉の学びの方法を学ぶ、学びの姿勢を学ぶ、将来についてのイメージをもつという現実的で具体的な学びのイメージをもつ(右側)ということであり、この2つのくくりの要素は相補関係にあり、互いの要素を行き来することで学びの効果が高められると考察している(川島、梓川、岩本、2018)。

前述したように、今回の分析において、この2つの大きなくくりと関係性については、大きく異なることはないと考えられる。しかしながら、今回の分析において、特徴的に捉えられたことは次のようになる。

①「ソーシャルワーク的価値への接近」の特徴的な要素

第一の段階においては、学びの土台・出発点として、シンプルに知ることを挙げている学生が多い。状況や場所など、様々なものを知っていくとともに「実情を知る」「違いを知る」「雰囲気を知る」というように、知ることに質的なレベルが上がっている。

第三の段階においては、第二の段階のつながりや関係性の体験を通じて、これまでの自分を見つめ直し、自分と他者を再認識し、自らの視野の広がりや深まりの段階に入っていく。しかし、2015年度に示されたように、自分の内面に向けての深い気づきはあまり確認できない。さらに自他の相互の支援や尊重というソーシャルワーク的価値への接近に関しても、ここを取り上げる学生(カードの枚数)は少ないだけでなく、その内容も、相手を尊重することは大切であることに気づいたというレベルであり、やや表面的な捉え方となっている。

②「福祉の学びを通じた将来へのイメージ」の特徴的な要素

第一の段階においては、「学び方の手法を学ぶ」の「①学び方、ノウハウを身につけた」において、一連の学習プロセスのなかで、グループ活動におけるリーダーシップの取り方やチームのまとめ方など、グループ運営について学び、身につけている。また、実際に体験するということが大学生としての基盤をつくる上で重要であることへの気づきも多く多くの学生が挙げている。

第二の段階においては、まず「福祉の学びが深まる」のカテゴリーでは、社会福祉士という国家資格の取得を目的化するばかりではなく、その中身、実践力を学んでいくことが重要であるという、これから学びを積み上げていく初年次の学生にとって根本的、かつ重要なことを学ぶことができている。さらに「積極性・主体性の重要性に気づく」なかで、単に重要性に気づくだけではなく、見学実習、合宿、LAなど、本授業のあらゆる要素から気持ちが前向きになり、「意欲が向上」している。

#### 4. 今後の課題

前述のように、筆者らは、SW実習入門の科目を履修した学生のふりかえりの内容を3年間に渡って分析し、初年度実践教育プログラムにおいて、学生が何をどのように学んでいるのかを明らかにすることを目的として研究を進めている。

今回の分析は、その2段階目にあたるものであるが、次の段階として2017年度の授業のふりか

えりを同様の手法で分析し、3年間の分析結果から、社会福祉領域における初年次教育プログラム、特に実践教育領域に必要な要素を抽出したい。さらに、実践教育以外に、講義科目、演習科目、授業外での課外活動、ボランティア活動、社会活動などを通じた学生の学びの経験ともリンクさせて、社会福祉学科における4年間の学びと、それが卒業後にどのように活かされているかについて探ることができればと考えている。また同時に、学生の学びという主観的なものから精度の高い結果を導き出すかという調査方法についての工夫も重ねていきたい。

#### 【引用及び参考文献】

- 川島恵美・梓川一・岩本裕子（2016）. 「初年次実践教育の方法に関する研究－千刈合宿を通じた学びの検証－」. 『関西学院大学高等教育研究』第6号, 1-16
- 川島恵美・梓川一・岩本裕子（2018）. 「初年次実践教育において涵養されること－ソーシャルワーク実習入門における学生の学びを通じて－」. 『Human Welfare』第10巻第1号, 129-137
- 川延宗之（2007）. 「社会福祉専門職養成教育における初年次教育の課題」『大妻女子大学人間関係研究』第8巻, 135-146.
- 山浦晴男（2016）. 『質的統合法入門』. 医学書院.

## What 1<sup>st</sup> Year Students Absorb from the Practical Education : Part 2 – Learning through “the Introductory Social Work Practicum” Course in 2016

Emi Kawashima\*<sup>1</sup>, Hajime Azusagawa\*<sup>2</sup> and Yuko Iwamoto\*<sup>3</sup>

### ABSTRACT

This is part of ongoing research into identifying the most effective components of the 1<sup>st</sup> year social work curriculum. The authors conducted qualitative analysis of what 1<sup>st</sup> year students learned from a semester course of “the Introductory Social Work Practicum”, offered as the first phase of the practicum training program at the Department of Social Work in the School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University. In 2015, students of this course filled out a feedback form in the last class, and their responses to “What did you learn from this course?” were transferred onto descriptive data cards and clustered using the KJ method. This paper presents findings from a similar analysis of students’ feedback in the 2016 course. The recent survey generally demonstrated comparable outcomes to 2015, that is from a wide range of experiences as well as wider and deeper perspectives obtained through interacting with people, the students became more appreciative of the values of social work, while they acquired practical learning methods, explored further social work studies, and realized the significance of their initiative and engagement in learning, enabling them to visualize their academic track in subsequent years in this department, and to define a clearer direction for their future in this field. Compared to the previous analysis, however, the width and depth of perspectives gained from the coursework turned out to be narrower. On the other hand, the wider range of awareness in developing their learning methods was noted in the 2016 cohort.

**Key words :** first year practical education, learning through experience, learning of how to learn

\* 1 Associate Professor, School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University

\* 2 Professor, Department of Social Care, Higashiosaka Junior College

\* 3 Associate Professor, School of Education, Kansai University of International Studies